



### 勝 義 孝 名 誉 教 授 略 歴

明治30年10月18日	京都市に生まれる	昭和21年2月～28年9月	
大正8年5月	京都府立医学専門学校卒業	昭和21年9月	京都府立医科大学学長
大正8年6月	慶応義塾大学医学部助手 (解剖学教室)	昭和23年1月	医学視学委員 京都府立医科大学教授 (生物物理化学教室)
大正13年4月	京都帝国大学医学部助手 (生理学教室)	昭和25年12月	日本学術会議会員 (第七部全国区基礎医学)
大正14年8月	京都帝国大学医学部講師 (生理学教室)	昭和31年2月	京都府立医科大学教授 (第二生理学教室)
大正15年8月	京都府立医科大学助教授 (解剖学教室)	昭和32年12月	京都府立医科大学名誉教授
昭和2年3月	医学博士	昭和32年12月	華頂短期大学教授
昭和3年4月	京都府立医科大学教授 (解剖学教室)	昭和36年4月	関西医科大学教授
昭和4年4月	欧米各国へ出張	昭和40年4月	武庫川女子大学家政学部教授
昭和18年1月	勲四等瑞宝章	昭和42年11月	勲三等旭日中綬章
昭和18年12月	学術研究会議会員	平成4年7月20日	老衰のため逝去
		平成4年8月11日	従三位に叙される

## 勝 義 孝 先 生 を 偲 ん で

日本生理学会特別会員 勝 義孝先生 が平成4年7月20日老衰のため自宅にて逝去されました。享年94歳でした。

先生は明治30年10月18日京都市にお生まれになり、大正8年5月京都府立医学専門学校を優秀な成績で御卒業、慶応義塾大学医学部助手、京都帝国大学医学部講師、京都府立医科大学講師および助教授を歴任され、昭和3年解剖学教室の初代教授となられ、昭和23年には世界に先駆けて生物物理化学教室を興し、その教授に就任されました。

昭和30年、新制医科大学発足と共に生理学教室は2教室となり、従来の生理学教室（吉村寿人教授）が第一生理学教室、生物物理化学教室（勝 義孝教授）が第二生理学教室となりました。

また先生は昭和21年から昭和28年までの8年間にわたり学長をつとめられ、終戦の混乱期に適正な対処を行い、基礎医学教室ならびに総合講堂の建設を行うなど、新制医科大学の基礎を作って旧制よりの移行を円滑に進め、大学の運営、発展に大きな貢献をされました。

学外にあっては、昭和18年学術研究会議会員に任じられて以来、昭和22年より3期にわたり視学委員を、また昭和25年には第2回日本学術会議会員となり、本邦医学研究の現状調査を行って、現行医学研究題目集、本邦医学研究現況を編纂する等の活躍をされ、その御功績には多大なものがありました。

先生の御研究は、世界に先駆けて生物物理化学教室

を創設されたことから明らかなように、終始一貫して生命現象の物理化学的探求に向けられ、イオン活量、膜電位、細胞膜の透過性に関する理論的、実験的解析に始まり、蛋白質の界面化学、赤血球の物理化学などに及び、現在の生物物理化学研究の発展の基礎を築いたものとして、高い評価を得られました。その間、自著、指導論文は600編に及び、また約200名の研究者を養成されました。

退職後は華頂短期大学、関西医科大学、武庫川女子大学ならびに同短期大学教授を昭和47年3月まで勤められました。

先生は端正な英国風の紳士で、私が初めてお目にかかったのは第30回日本生理学大会（昭和28年、九大瀬尾愛三郎教授）の折でありました。学会初日に、「生物膜の膜電位差からの考案」の演題で発表されましたが、先生の警咳に接し深い感銘を受けたことが記憶に残っております。5年後、先生の後任として北海道大学から赴任するとは夢にも思っておりませんでした。

先生は生前から解剖学の献体を希望され、死後も医学生教育、研究に役立ちたいと念願しておられました。7月20日夜、外山敬介、森本武利の両教授と共に、医大病院内の霊安室で最後のお別れをさせていただきました。先生のご遺志を尊重し、大学の発展と医学の前進のため、今後も努力することをお誓いいたします。どうぞ安らかにお眠り下さい。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

（平成4年8月 岩瀬善彦）